

『源氏物語』「幻」卷贈答歌考

——光源氏と中将の君——

杉浦 一彰

一、問題の所在

『源氏物語』「幻」卷は、新春の景からその年の歳暮までの約一年間を時間的な範囲とし、月次絵巻的に年中行事の光景を交えつつ、光源氏の生前最後の姿が語られる。中心の話題は、季節の推移にも全く癒える様子を見せない光源氏の悲哀と、それと並行して日々強まる彼の道心である。そのような物語展開の中でも光源氏と女性との交流は語られていくが、突如として物語内で存在感を増してくる中将の君に注目したい。

たとえば、「幻」卷では、二十六首の和歌が詠まれるが、光源氏の独詠歌が十二首と最も多く、その他は光源氏と他者との贈答歌である。その中で兵部卿宮、明石の君、花散里、夕霧、御導師との間には一度しかなされない贈答が、中将の君との間では二度もなされている。それはなぜなのか。

本稿は、その光源氏と中将の君の二組四首の贈答歌を考察の対象とする。したがって、中将の君の登場場面を全て抽出し、各場面の描写を通して、その存在意義を考察するものではない。「幻」卷の二つの和歌贈答場面に問題の焦点を絞り込み、そこでの表現のありようを慎重に辿ってみたい。この贈答により、紫の上喪失の悲しみに沈む光源氏に何か変化は兆

したのか。また、阿部秋生の「召人」論のために、これまで看過されてきた中將の君の心情についても考えてみたい。

二、「祭の日」の贈答

紫の上を喪った当初の惑乱こそ落ち着いた光源氏であったが、悲しみを払拭することなどできるはずもなく、桜や梅といった景物に、春を好んだ故人の面影を追想する。やがて季節は夏へと移り、光源氏は、「祭の日」を迎える。

祭の日、いとつれづれにて、「今日は物見るとて、人々心地よげならむかし」とて、御社のありさまなど思しやる。「女房などいかにさうざうしからむ。里に忍びて出でて見よかし」などのたまふ。中將の君の東面にうたた寝したるを、歩みおはして見たまへば、いとささやかにをかしきさまして起き上がりたり。つらつきはなやかに、にほひたる顔をもて隠して、すこしふくだみたる髪のかかりなど、いとをかしげなり。紅の黄ばみたる氣添ひたる袴、萱草色の単衣、いと濃き鈍色に黒きなど、うるはしからず重なりて、裳、唐衣も脱ぎすべしたりけるを、とかくひき掛けなどするに、葵をかたはらに置きたりけるをとりたまひて、「いかにとかや、この名こそ忘れにけれ」とのたまへば、

さもこそはよるべの水に水草めめ今日のかざしよ名さへ忘るる

と恥ぢらひて聞こゆ。げに、いとほしくて、

おほかたは思ひすててし世なれどもあふひはなほやつみをかすべき

など、一人ばかりは思し放たぬ氣色なり。

(幻・④・五三七〜五三九頁)⁽³⁾

中將の君を見かけた光源氏は、「祭」の景物である「葵」を手にしながら言葉をかける。そうした積極的な行動は、「絶

えて御方々にも渡りたまはず」(五二二頁)、女房との「いにしへの物語」(同)や勤行に明け暮れていたありようからすると、奇異の感が拭えない。柳井滋が指摘するように、「一瞬紫上を忘れてる」ようにさえ見えてしまう。その理由として次のような二つの解釈が示されている。

・『玉上評釈』

この昼下がりの情事は、実はこの「葵」という言葉の縁から生じたものである。作者はその縁語的連関の場面の具体化を、中將の君という女房でやってみせたのである。

(二五五頁)

・『新編全集』

御方々との交渉を語った後、葵祭にちなんで召人中將の君を点出する。めぐりくる行事を背景に、彼女におのずと執着されるのは、彼女が紫の上に親しく仕えた女房だからである。

(頭注・五三九頁)

前者は、「葵」の「縁語的連関」に注目した解釈で、林田孝和⁵⁾、原岡文子⁶⁾によって詳細な検証作業がなされている。後者は、贈答の〈場〉に触れた上で、贈答歌を交わす中將の君に注目する。ここで、光源氏に、「おしなべてには思したらざりし人々」(五二六頁)の一人として数えられる、中將の君の経歴について見ておくことにしよう。

中將の君とてさぶらふは、まだ小さくより見たまひ馴れにしを、いと忍びつつ見たまひ過ぐさずやありけむ、いとかたはらいたきことに思ひて馴れもきこえざりけるを、かく亡せたまひて後は、その方にはあらず、人よりことにらうたきものに心とどめ思したりしものをと思し出づるにつけて、かの御形見の筋をぞあはれと思したる。心ばせ、容貌などもめやすく、うなる松におほえたるけはひ、ただならましよりは、らうらうじと思ほす。

右引用で注意したいのは、二重傍線を附した「うなる松」という表現である。「河海抄」は、「幕上の松をなき人のかたみとみるかことくにこの中将君紫上のかたみにおほえたる也」と解釈する。つまり、「新編全集」はその解釈を援用する形で中将の君に付与された「かたみ」としての役割から、光源氏の行動の理由について説明したのである。三田村雅子は、より具体的に、中将の君の「役割は紫上の『形代』、『人形』につきてしまふ」と指摘している。

「祭の日」の場面の研究情況を確認してきたが、その傾向として次のようなことがいえる。すなわち、贈答の〈場〉や「葬」という景物、中将の君の人物造型には注目しても、登場人物の〈物語内行動〉は考慮されてこなかったということである。

しかし、二人の〈物語行動〉には看過し難いものがある。たとえば、光源氏は、「祭の日」を迎えても、「里に忍び出て出でて見よかし」と女房たちに勧めるだけで、自らが率先して「祭」見物に出かけようとはしなかった。「祭」のはなやいだ気分にも馴染めず、「いとつれづれ」な思いを抱く様子が語られているのみである。そのような心境では、女たちと和歌贈答をする気も起こらなかったと考えられよう。やはり中将の君を垣間見したことが契機となつていえるといえる。

垣間見は、男女の出会ひの契機として、平安朝の恋物語で方法化されていた。「源氏物語」でも、女を垣間見する男の姿がさまざまに語られているが、ここではそれが、中将の君の「うたた寝」姿であることに注意しなければなるまい。たとえば、「常夏」巻に、内大臣（元頭中将）が、娘雲井雁を垣間見する場面がある（二三八〜二三九頁）。内大臣の垣間見は、「羅の単衣」という雲居雁の装束から、「透きたまへる肌つき」へと移り、「手つき」、「うちやられたる御髪」、「つらつき」にまで及ぶ。読者はその眼差しに沿って官能的な気分を味わう。内大臣の垣間見は、「親の御目にはうつくしくのみ見ゆ」という句が添えられることで、その雰囲気中和されていくが、親子のような血縁関係がない男女の場合、そうした規制は働かなかつたことだろう。

つまり、中将の君の無防備な「うたた寝」姿を垣間見したことにより、光源氏の中で、「いとつれづれ」な思いを払拭するほどの欲望が芽生え、それこそが和歌詠出の原動力となっていくのである。

今度は、光源氏に見られる側の中将の君の行動に目を配りたい。垣間見に気づいた中将の君は、装束を「とかくひき掛けなどする」だけで、その場から逃れようとしなかった。しかも、男女の「逢ふ日」を連想させる「葵をかたはらに置いて」いる。こうした中将の君の行動からは、男に見られることへの禁忌意識は看取されず、むしろ全く対照的な男を誘惑しようとする意識さえうかがえる。しかも中将の君の側から、先じて次のような歌を贈っていたのである。

さもこそはよるべの水に水草ぬめ今日のかざしよ名さへ忘る
と恥ぢらひて聞こゆ。

この和歌について、吉井美弥子は、「自発的な贈歌というより光源氏のことばに応じた返答」と見るが、そもそも、「葵」が置かれていて初めて、「光源氏のことば」が生じるのであって、そこに、「恥ぢらう」姿に隠された、中将の君のより「自発的な」意識を認めるべきではないか。和歌表現を手がかりにして、中将の君の意識やその心情をさらに探っていききたい。「かざし」は、「葵」を言い換えた表現であり、「祭の日」に相應しい。「よるべの水」については、これまでさまざまに解釈が提起されているが、それらを整理した伊藤一男によると、次に引用する、『新編全集』の解釈が「おおむねこれのように思われる」という。^⑩

「寄る瓶の水」は、神に供える水で、神霊が憑るといふ。影を映して占ったり、飲んで誓いをたてたりする。ここは、それが古くなり「水草」が生えた。上の句は「寄る辺」をかけ、私に見向きなさらぬのは仕方ないこと、の意。顧

みてくれぬ源氏をさりげなく恨む女歌の典型。

(頭注一〇・五三八～五三九頁)

その一方では、『細流抄』の「中將君は紫上よるへにしてさふらひ侍也み草ぬめとは今紫上ましまさすしてたよりをうしなひたる也」^①や、『玉上評釈』の「頼つて生きるといふ意をこめ源氏をなぞらえた」(一五三～一五四頁)という解釈もある。本稿も、それらの解釈に倣つて、「よるべの水」に、「頼つて生きるといふ意」を認めるが、中將の君が誰を意識してそれを詠作したかが、和歌解釈上の要点となつていくだろう。

この和歌は、吉井が指摘したように、光源氏の「この名こそ忘れにけれ」への返答である。それにも関わらず、中將の君は、「葵」を避け、「今日のかざし」といふ表現を用いた。「葵」は、男女の「逢ふ日」を想起させる小道具であるが、その含意が相手に認識されないと、単なる「祭」の「かざし」にしかならない。「今日のかざし」といふばかりした表現を用いた中將の君には、光源氏に男女の「逢ふ日」を思い出させるといふ意識が働いていたのである。つまり、「よるべ」である光源氏に媚態を見せ、誘いをかける「自発的」な中將の君の姿が見える和歌であつた。

そうした誘惑に対し、垣間見によつて、相手への欲望を高めていた光源氏は、自ずと次のような返歌をする。

おほかたは思ひすててし世なれどもあふひはなほやつみをかすべき

など、一人ばかりは思し放たぬ気色なり。

光源氏は、中將の君の要求に応じるように、「あふひ」を詠み込み、その上、情交關係を暗示する「つみ(摘み・罪)」という表現まで用いている。『古典集成』は、『葵』『罪』は神事にかかわる縁語(頭注一・一四四頁)という指摘にとどまるが、次に引用する和歌を参照してみると、より一層ここで詠われた「つみ」が鮮明になるだろう。

くやくそつみをかしけるあふひ草神のゆるせるかざしならぬに

(若菜下・④・二三三頁)

「祭の日」(二三三頁)に詠まれた柏木の独詠歌である。詠作時の柏木の心情を示す、「くやくし」は、「自分のしてしまつた行為について、それをしなければよかつたとくやくむ気持ちを用う」¹²⁾意。女三の宮への慕情を持ちつつも、一方では情欲に動かされ、「神のゆる」ささない密通関係を持つたことを悔やむ柏木の姿がうかがえる和歌である。

光源氏の場合、今は紫の上の服喪中であつた。そして女たちへの「おほかた」の「思ひ」を捨て去つていた光源氏からすれば、中将の君との関係は、柏木が思い悩んだ「つみ」以外のなにもでもなかつたのである。しかしそう思う自制心は、中将の君の「うたた寝」姿を見、「葵」を手にした時、もろくも瓦解してしまふ。「つみをかすべき」という形で結ばれた光源氏の返歌には、「すき心の復活」¹³⁾さえ見ることができるのである。

このように、「祭の日」の和歌贈答では、「いとつれづれ」な思いを抱いていた光源氏が、中将の君の度重なる誘惑によつて、「一人ばかりは思し放たぬ気色」を見せるようになるまでの過程が語られていた。紫の上追慕の情がつのり、「なごりなき御聖心の深くなりゆく」(五三三頁)光源氏であつたが、その一方では「あるまじき絆」(五三三頁)を未だ断ち切れずにいたのである。ここで語られるのは、「悲しみをお互いになぐさめあつている主従としての愛情」¹⁴⁾ではなく、男女間の愛情である。言わば、光源氏の「わろかりける心のほど」(五二六頁)が窺えてしまふ贈答なのであつた。

三、「御正日」の贈答

「祭の日」の贈答を終えた光源氏は、池の蓮、七夕といつた景物を、「ながめ暮らし」(五四三頁)、その都度、悲しみや世の無常を独詠歌という形で詠っていく。そしてついに、紫の上の「御正日」を迎えることになる。

風の音さへただならずなりゆくころしも、御法事の営みにて、朔日ごろは紛らはしげなり。今まで経にける月日よと思すにも、あきれて明かし暮らしたまふ。御正日には、上下の人々みな斎して、かの曼荼羅など今日ぞ供養せさせたまふ。例の宵の御行ひに、御手水まゐらす中將の君の扇に、

君恋ふる涙は際もなきものを今日をば何の果てといふらんと書きつけたるを取りて見たまひて、

人恋ふるわが身も末になりゆけど残り多かる涙なりけり

と、書き添へたまふ。

(幻・④・五四三〜五四四頁)

右引用では、「風の音さへ」と語り起こされており、「正日」が近づくにつれて、「ただならずなりゆく」光源氏の心のありようが暗示される。だが、「正日」当日は簡単な情景描写しかなされぬ。そのため、贈答歌によつて光源氏の「ただならず」ない感情が表現されていると考えられてくるのである。贈歌となる中將の君の和歌から見えていくことにしよう。

この和歌で注目したいのは、招涼の具である「扇」にそれが記されていることである。しかし諸注釈書において和歌の媒体的役割を担う「扇」の存在に触れているものは、次に引用する『玉上評釈』のみであった。

ことある時は扇を新調し、それに、心のたけを示す歌を書きつける。この歌をかいた扇をにおいて、水さしを手に、源氏がたらいの上に手を出すのを待つ。そのとき源氏は、その扇をとり、歌を見たのである。／すなわち、横に源氏は三十一文字を書き添える。源氏出家ののち、いかばかり中將はこの扇に涙を注ぐことであろう。最上の、最高の御形

見とするであろう。

(一六九頁)

この説明文には解釈上二つの問題があらう。一点目は、中將の君が光源氏から「最高の御形見」をもらうために、「扇」を準備したかのように理解されたことである。中將の君は、はたして光源氏と贈答する意思があつたのであらうか。二点目は、「ことある時には……」という説明では、中將の君が「扇」に和歌を記した意図についての説明が不足している。「扇」でなければならなかつた理由があらう。また、扇の贈答には次の指摘があることに注意したい。

班婕妤「怨歌行」の故事にちなみ、秋「飽き」を想起させる()には (a) 捨てられる身の象徴となる扇は、特に男女間での贈答を忌まれた。一方では、(b) 「あふぎ」に「逢ふ」の意を掛け、再会の呪物として旅人への餞にしたり、別れに臨んでとり交わしたり(源氏・花宴巻、謡曲『班女』)、末広がりの形状によそえて祝儀の引出物とされたりもした。⁽¹⁵⁾ (a)・(b)の記号及び傍線は引用者)

『玉上評釈』の解釈には、中將の君が「扇」に和歌を記す際、この (a)・(b) どちらを意識していたのか、あるいはどちらを意識していなかつたのか、という容易に看過し得ない視点が抜け落ちていたのである。

ところで、『源氏物語』では、自分の扇に和歌を記して、それを光源氏へと贈る女性が中將の君以外にも二人登場していた。夕顔と源典侍である。参考として次に該当箇所を引用する。

・夕顔

ありつる扇御覽ずれば、もて馴らしたる移り香いとしみ深うなつかしくて、をかしうすさび書きたり。

心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花

そこはかとなく書きまぎらはしたるもあてはかにゆゑづきたれば、いと思ひのほかにかしうおほえたまふ。

・源典侍

よしある扇の端を折りて、

「はかなしや人のかざせるあふひゆゑ神のゆるしの今日を待ちける

注連の内には」とある手を思し出づれば、かの典侍なりけり。

(葵・②・二九頁)

前者は、「夕顔の花」を、後者は、「あふひ」を中心的な話題とした和歌である。両歌には、「扇」の語句が詠み込まれておらず、またそれと関連しそうな表現も見出し難いのであるが、両歌には「扇」が媒体となる意義についてさまざまな解釈が提出されている。⁽¹⁶⁾ここでそれらの解釈に触れる余裕は無いが、(a)・(b)の影響の有無を考える際、和歌表現だけでなく、詠作された情況にも注目する必要があると考えられてくる。以下、詠作された情況にも目を向けつつ、中将の君の和歌を追っていきたい。

中将の君の扇に、

君恋ふる涙は際もなきものを今日をば何の果てといふらん

と書きつけたるを……

「君」とは、紫の上を指し、「果て」は、紫の上の一周忌を指す。また、和歌で詠まれる「今日」は、詠作者の「いつもとは異なる」意識を反映する表現であるという。自ずと、「正日」に対する思いの強さがくみ取れてくる。そして種々の表現からは、「君」紫の上への意識はあっても、贈答をする光源氏への意識が全くないことが確認される。中将の君は、「扇」

(夕顔・①・一三九〜一四〇頁)

に和歌を「書きつけ」たが、それを光源氏へと贈る意思はなかったことが窺えてくるのである。

次に、和歌が詠作された情況を確認していききたい。「正日」に催される「御法事」は、紫の上の追善供養と光源氏の心の救済を目的とした重要な行事である。しかし、「法事」の正客となる資格を持たない女房中将の君は、後景のように、「例の宵の御行ひ」に従事するばかりであった。

ここで、「幻」巻に散見される女房たちのありようを確認しておく、彼女の行動が理解されてこよう。光源氏が女房たちと、「いにしへの物語」(五二二頁)をする様子が繰り返して語られてきたが、女房たちは、生前の紫の上の様子を「ほの聞こえ」(五二三頁)出るだけで、「おのおのうち出でまほし」(五二六頁)い言葉を出さないようにしていた。私的感情を押し殺し、行動していたのである。

紫の上から、「人よりことにらうたきものに心とどめ」(五二六頁)られていた中将の君は、「正日」という節目の日を迎えて、故人を「恋ふる」気持ちが高まつていたことであろう。しかしそれは女房として職務にあたる際には、歓迎できない感情である。そこで、中将の君は、「心のたけ」を「扇」に「書きつけ」ることにしたのではないか。女性にとって扇は他者の眼差しから顔を覆うための具であるが、そこに「描かれた絵や添えられた詩歌により、口には出さぬ何かを表現することもある」という¹⁸⁾これを敷衍すれば、筆記者の口外できない感情を「扇」に書き記すことで、感情を表出しないようにする機能があつたといえる。

女房である中将の君は、分を弁え、「扇」に和歌を「書きつけ」る形で紫の上への哀悼の意を示していたのである。

しかし光源氏は、中将の君の「扇」の存在に気づいてしまう。その結果、『新編全集』が指摘するように、故人への「断ちがたい愛執の心をゆさぶ」(頭注・五四四頁)られることになる。「祭の日」の贈答歌のように、ここでも中将の君の和歌を契機にして、光源氏の返歌が導き出されていくのである。

人恋ふるわが身も末になりゆけど残り多かる涙なりけり

と、書き添へたまふ。

この和歌で注意したいのは、わざわざ中将の君の「扇」に記したことである。諸注釈書は特に注目していないのだが、上述したように、男女間の扇の贈答には、(a)・(b)の働きがあり、その影響の有無について留意する必要があるだろう。まずは和歌表現を手がかりにして、光源氏の心境を明らかにしていきたい。

光源氏の返歌は、「君」から「人」といった表現の異同は認められるが、内容上、中将の君の贈歌とそう変わらないように見える。小町谷照彦が、「お互いの涙の確認であつて、光源氏の独詠と本質的に異なることはない」と捉え、高橋文二が、「さしたることのない歌」と評価したのも肯ける。

しかし、光源氏の和歌には、「独詠」とは捉えがたい表現が確認される。たとえば、「わが身も末になりゆけど」は、「残りすくなしや」(五三〇頁)、「今は限りのほど近き身」(五三三頁)という形で繰り返し語られてきた年齢意識による表現として、見受けられるが、その一方では、贈歌の「際」や「果て」に呼応した表現ともいえよう。光源氏は、中将の君の和歌を受けたことで「身の末」認識を確固にし、道心を一層深めているのである。

また、和歌が「涙なりけり」という形で結ばれている点も看過し難いものがある。「幻」巻には、「御目おし拭ひ隠したまふに紛れずやがてこぼるる御涙」(五二六頁)、「いとせきがたき涙の雨のみ降りまされば」(五二八頁)、「例の、涙ぐみたまへれば」(五三〇頁)、「例の涙のもろさは、ふとこぼれ出でぬるもいと苦し」(五三二頁)というように、「涙」を流す光源氏の様子がしばしば語られている。そのため、高橋は、光源氏の鬱情が、「涙によって浄化してゆくかの如き路程が、よく表れている」と指摘する。しかし、「涙」は、紫の上への思いや現世に残る者への思いから流されていたのであり、むしろそれは現世への未練や執着を象徴的に示しているといえるのではないか。「涙なりけり」で結ばれた和歌には、中将の

君のような紫の上を追慕する気持ちと、出家せずに過してきた日々を回想しそれを後悔する光源氏固有の気持ちが含まれていたのである。

次に、中将の君の「扇」に、返歌を「書き添へ」た意図を考えてみたい。しかし、この場面だけでは情況描写が限られており、判断が難しい。そこで次の二つの場面を参考にしたい。光源氏は隼月夜と女三の宮の扇に和歌を記していたのである。

・隼月夜

かのしるしの扇は、桜の三重がさねにて、濃きかたに霞める月を描きて水にうつしたる心ばへ、目馴れたれど、ゆゑなつかしうもてならしたり。「草の原をば」と言ひしさまのみ心にかかりたまへば、

世に知らぬ心地こそすれ有明の月のゆくへを空にまがへて

と書きつけたまひて、置きたまへり。

(花宴・①・三六〇頁)

・女三の宮

「かかる方の御営みをも、もろともにいそがんものとは思ひよらざりしことなり。よし、後の世にだに、かの花の中の宿に隔てなくと思ほせ」とて、うち泣きたまひぬ。

はちす葉をおなじ台と契りおきて露のわかるる今日ぞ悲しき

と御硯にさし濡らして、香染なる御扇に書きつけたまへり。

(鈴虫・④・三七六頁)

前者は、隼月夜への思いを詠った独詠歌である。隼月夜との間で交換した、「しるしの扇」に「世に知らぬ心地」を「書きつけ」ることで、逢えぬ嘆きを慰めようとする光源氏の姿がそこにはある。後者は、この時尼となっていた女三の宮へ

の贈歌である。在俗者と出家者との間には、物心両面で隔たりが生じるものであるが、その溝を少しでも埋めようとするかのように、女三の宮の「香染なる御扇」に贈歌を記す。「後の世にだに、……」という直前の発言にも注意しておきたい。以上のことから、相手の扇に和歌を記す時、光源氏には次のような意識があつたと考えられる。

① 相手と空間的・あるいは心理的に距離が離れていたため、ついつてきた気持ちを、相手の扇に和歌を記すことで、慰めようとした。

② さらに、前に引用した、(b)の働きのごとく、再会の呪物である「扇」に和歌を記すことで、相手との再会を期待・希求する気持ちも込めた。

右の①・②を念頭に、「人恋ふる……」の和歌へと戻りたい。前述したように、和歌表現を見ると、光源氏の意識が、「人」紫の上へのみ向けられていたことは明らかである。したがって、「扇」に和歌を「書き添へ」たのは、中将の君に渡すためではなく、②のように紫の上と極楽世界での再会を祈る気持ちが働いていたためだと理解されてくる。その行為は、もはや光源氏の意識が、中将の君に代表される現世の女たちに向けられなくなったことを証しているともいえるのである。

「正日」の贈答歌は、「扇」に和歌を記す動機からして両者間にずれが生じていた。中将の君は、「君恋ふる」気持ちを隠すために、光源氏は、「恋ふる」紫の上と彼岸で再会する願いを込めて、「扇」に和歌をつづるが、そうしたずれには、中将の君との「あるまじき絆」（五三三頁）を断ち切り、出家の志を固めた光源氏の精神性が示されているのである。

四、まとめ

中将の君は、「御形見の筋」や、「召人」という面ばかりが注目され、これまで彼女に人格というものを認めないことが前提とされてきた。しかし、「祭の日」、そして「正日」の贈答歌は、中将の君の自由意志に基づく行動がなければ、成立しなかったものである。前者では光源氏を誘惑する姿が、後者では紫の上を追悼する気持ちやさやかに表明する姿が語られている。これを見ても、はたして中将の君に人格が無いなどといえるだろうか。

ところで、二つの贈答場面には、在俗者としての生と出家者としての生との狭間でゆれる光源氏の心の種々相が現れている。前者では、出家をためらわせる「絆」に縛られる姿が、後者では、それを断ちきり、出家の志を固めていく心境が語られていた。物語作者は、悲哀に沈む光源氏が、現世への未練を清算して出家するまでの心理過程を描出するために、紫の上の（ゆかり）である中将の君という（端役）を登場させ、男女間の贈答、紫の上追悼の贈答といった趣の違う二つの贈答場面を用意したのであった。

注

- (1) 武者小路辰子「中将の君―源氏物語の女房観―」（『日本文学』、八一―二二、一九五九年二月）など。
- (2) 阿部秋生「召人」について」（『日本文学』、五一―九、一九五六年九月）
- (3) 「源氏物語」の本文引用はすべて、阿部秋生ほか校注・訳『新編日本古典文学全集』、小学館、一九九四―一九九八年（『新編全集』と略記）による。引用末尾の（ ）には、巻名・分冊数・頁数を記す。なお、本文には私に傍線など附した箇所がある。また、以下の注釈書も参照した。略記とともに掲載する。

・「玉上評釈」→玉上琢弥「源氏物語評釈 九卷」、角川書店、一九六七年

・「古典集成」→石田稷二ほか校注「源氏物語 六」(新潮日本古典集成五〇)、新潮社、一九八二年

(4) 柳井滋「御法・幻巻の主題」(増田繁夫ほか編「源氏物語研究集成 第二巻 源氏物語の主題下」、風間書房、一九九九年)

(5) 林田孝和「源氏物語にみる祭りの場」(「源氏物語の発想」、桜楓社、一九八〇年)

(6) 原岡文子「源氏物語」の「祭」をめぐって」(「源氏物語の人物と表現 その両義的展開」、翰林書房、二〇〇三年)

(7) 玉上琢弥編「紫明抄・河海抄」、角川書店、一九六八年

(8) 三田村雅子「源氏物語における〈形代〉」(「源氏物語 感覚の論理」、有精堂出版、一九九六年)

(9) 吉井美弥子「女房たちの歌―暴かれる薫―」(池田節子ほか編「源氏物語の歌と人物」、翰林書房、二〇〇九年)

(10) 伊藤一男「寄る瓶の水」(鈴木一雄監修「源氏物語の鑑賞と基礎知識 一九 御法・幻」、至文堂、二〇〇一年)

(11) 伊井春樹編「内閣文庫本 細流抄」、桜楓社、一九七五年

(12) 大野晋ほか編「岩波古語辞典 補訂版」、岩波書店、一九九〇年

(13) 呉羽長「哀傷の春から孤愁の四季へ―「源氏物語」「幻」巻論―」(「平安文学研究」、七四、一九八五年二月)

(14) 注(一) 武者小路論文

(15) 藤本宗利「扇」(山口明穂ほか編「王朝文化辞典―万葉から江戸まで」、朝倉書店、二〇〇八年)

(16) 夕顔については、黒須重彦「白き扇」について」(「源氏物語私論―夕顔の巻を中心として―」、笠間書院、一九九〇年)が、

「夕顔」巻の展開と、(ま)との関わりを指摘する。源典侍については、小林茂美「源典侍物語の伝承構造論」(「源氏物語論序説」、桜楓社、一九七八年)が、「端を折る」仕草と「逢ふ」意識との関係を指摘する。

(17) 村尾誠一「今日」(久保田淳ほか編「歌ことば歌枕大辞典」、角川書店、一九九九年)

(18) 藤本宗利「扇」(秋山虔編「王朝語辞典」、東京大学出版会、二〇〇〇年)

(19) 小町谷照彦「幻」の方法についての試論―和歌による作品論へのアプローチ―(「源氏物語の歌ことば表現」、東京大学出版会、一九八四年)

(20) 高橋文二「幻」巻における光源氏の自己救済をめぐって」(「物語鎮魂論」、桜楓社、一九九〇年)

(すぎむら・かずあき/博士後期課程二年)